

---

# Heroes

Joker

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Heroes

### 【Nコード】

N5350L

### 【作者名】

Joker

### 【あらすじ】

俺こと伊達倫太郎は徐々に発音が出来なくなる病（吃音）にかか  
る。そして15歳になり、東京の高校に入った。そこで出会う友人  
に大きな影響を受け、俺は自分の進路を決める。そんな俺が選んだ  
のは教師になることだった。そして、俺の学生生活が幕を開ける。

## プロローグ

「残念ですが、あなたはもう普通の人のように話すことは出来ません」

俺が医師から宣告を受けたのは十二歳の頃だった。

まさか、俺が？ どうして俺が？

自分に答えの出ない問いを問いかけつつ、日々が過ぎていった。

小学校を卒業して、中学校に入ると徐々に言葉が出にくくなった。始めはア行、次にタ行という風に発音できない音が増えていく。周囲からは嘲笑と侮蔑をもって迎えられた。

教師からは笑われ、クラスメートからは馬鹿にされ、俺はすっかり中学の三年間で卑屈になっていった。

高校に入る前に俺は東京に引越し、その高校に通うことになった。東京でも有数の進学校ある。

高校に入ると予想に反してすぐに友達ができた。

「よお、この拳銃なんだけとさあ。最新モデルで今アメリカで使われてるヤツなんだよ」

最初の会話がこんなのだ。俺は軍事関係には無知だし、興味もない。ちなみに一学期の始業式を終えて下校しているときに初めて口を利いた。

「……そ」

「そ？」

「そうか」

初めての友人は幅の広い顔をほころばせて反応する。そういや、こいつはいつでも幸せそうな顔をしているな。めがねをかけているせいか、知的に見える。横長の細い目をしていることも特徴だ。ガタイもやたらいいけど、武道でもしていたんだろうか。それと肩幅がとても広く見える。

「……ま、だ名前を……聞いて、いな、かったな」

「俺？ 俺は福沢海舟<sup>ふくざわかいしゅう</sup>。兵庫県出身十五歳独身」

お前は江戸時代の人間か？

「お前は？」

福沢海舟は俺に自己紹介を求めた。

「……だ、伊達<sup>だて</sup>……り、ん、たろう」

声に出せない。発音が苦手な、もしくは出来ない音を出そうとするとこうなる。本名は伊達倫太郎<sup>だてりんたろう</sup>。北海道生まれだ。といっても、

両親は東京生まれだから北海道弁はあまり話せない。

「よろしくな、リン」

いきなりあだ名かよ。

福沢はにかつと歯を見せて笑った。

こんな人間を見たのは初めてだ。大抵は、俺の喋り方を見ると馬鹿にするか、離れていくか。どちらかだった。でも、こいつは違う。

「よ……よろしく」

そして高校三年生になった俺は人生を決める決断その一をすることになる。

## プロローグ（後書き）

こんばんは、Jokerです。

『種時く者』 『異説鬼退治』 に続く連載をさせていただきます。  
実はこの話、一年ほど前からプロット作っていたのですが諸々の都合により出せず、今更出すことに相成りました。

『種時く者』 みたいに美形が出てくるわけでもなく、『異説鬼退治』  
のようにお爺さんとお婆さんの爆裂ギャグがあるわけでもありませんが、お楽しみいただければ幸いです。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

## 第一話：進路

「俺……〇大学、に……進みます」

大学受験を数カ月後に控えた俺は担任の先生と面談した。

「どこの学部を受けるんだ？」

俺の担任は頭に「や」のつく自由業の方々みたいな外見をしている。教師というのに革ジャン、ジーパンでいるからなおさら本物みたいに思えてくる。おまけに角刈りときているから、ついたあだ名が組長だ。

「人間……か、がく部です」

「行けるのか？」

「行きたい、です」

それで進路の面談は終わった。

最後、思いつきり反対されたがそれをつっぱねてやった。意志まげてまで進学したいとは思わないから。

五時過ぎ、ほとんど誰もいないグラウンドを歩きながら俺は一人で物思いにふけていた。

といつても何を考えてるでもない。ぼんやりとしていただけ。

「よお、リン。面談終わったんだな」

海舟が声をかけてきた。

まだ帰ってなかったのか。

「ああ」

「それで？ あのマフィアは何て？」

マフィアというのは俺のクラス担任のあだ名の二つ目。

「……駄目……だと」

「やっぱりなあ」

「おも、い……きり……拒否し、て、やった」

海舟は豪快に笑う。

「それでこそリンだ！ うん、見直したぞ！」

俺でなくてもそこは拒否すると思うけど。

それから俺たちは今年PSPで発売される『海の軌跡』シリーズについて延々と語りながら帰路に着いた。

そんな日々がしばらく続く。

やがて十一月を超え、十二月が訪れ、年が明けた。

一月。センター試験を終え、先生との面談が始まる。

ちなみに俺のセンター試験平均は七割五分程度。ちよつと〇大学を狙うにはきつい、かもしれない。

「伊達！ お前、浪人するつもりか！！」

担任である組長のドスの効いた声が教室に響く。二者面談なので、カツあげにでもあっている気分だ。

「い……え」

「〇大学人間科学部だぞ！ 二次試験でいくらお前が数学が出来るからといって逆転できるとでも思っているのか」  
相変わらず数字でしか語れないおっさんだ。

「……はい」

言い返せないのが悔しい。こんな時は俺は自分自身を恨む。

「勝手にせいッ！」

組長は怒って出て行ってしまった。

どっちにしろ、俺の中では決まっていたことだから変える気はない。  
い。

気分の悪さを残したまま、学校から帰る。今日は海舟の面談の日ではないから、俺一人だ。

（二月二十五日が本番かあ……やっぱり緊張するな。これで落ちたら、俺浪人だし）

とうとうと雪が舞い散る中、家路を急ぐ。

そんな時に海舟からメールがきた。

『俺、K大学情報工学科に行くわ。お前、行き先決まったの？』

あいつらしい。

確か研究者になりたいって言ってたな。

そんなことを考えつつ、かじかみつつある手でカチカチと携帯を打つ。

『ああ。竹槍戦闘機落とし道場入門。またはルエビザ教団へ入信』  
多分こんなメール送ったらキチガイ扱いされるに違いない。

しかし、うちの学校はネタ教師の宝庫だから、こんな内容が通じるのだ。

竹槍で戦闘機を落とすとマジで豪語した体育教師。

学校の裏山で怪しい大鍋（に入った紫色の不思議な液体。もしかなくても危険な物質）をかき混ぜているところを発見された社会科教師。

金髪ホウキ頭で改造バイクに乗って出勤してくる英語教師（背中に『宇宙一撃滅』とプリントされているシャツを着てくる）。

そして、修学旅行で上海に行ったときマフィアと間違えられて逮捕された、うちの担任。

まだまだいるのだが、ここらへんにしておこう。話が進まない。そして、その後には

『O大学人間科学部にするよ』  
と付け足した。

やっぱり、行きたいところに行く方がいいと思う。

人生は一回なんだし、俺の人生は俺にしか責任持てない。俺を救うことが出来るのは俺だけだ。

俺は二月二十五日に向けて勉強を再開した。

## 第一話：進路（後書き）

こんばんは、Jokerです。

高校時代を懐かしみながら書いています。

あの頃は数学馬鹿でした。そして国語が壊滅的に出来ませんでした。よくもまあ国立大学なんて狙おうと思ったものです。

ところでモデルのO大学人間科学部、通称人科じんかと呼ばれている学部です。多分関西におられる方は知っているはず（？）ちなみに私は落ちました。とほほ。得意のはずの（高校で一位とったこともあるのに）数学でこけたからです。

それはさておき

また次回お会いできることを祈りつつ……

## 第二話：言葉探し

大学受験は成功した。奇跡的に。

三月十日の合格発表に行ってみると俺の名前がある。

早速その足で高校に報告に行った。

「おめでとう」

とマフィアからはとりあえず祝福の言葉をもたらった。

三月二十日に卒業式があるが、それまで家庭学習に励めと学年主任から告げられる。

もちろん、遊びまくるに決まっているが。

その足で海舟と合流し、高校の近くにあったゲーセンに行くことになった。

最近発売された格闘ゲームで遊ぶのが楽しみの一つなのだ。

二時間ほどいたらだと遊んだ後、家に帰る。

何だか肩の重荷が降りた気分だ。

それから、俺は何も考えず卒業式まで過ごすつもりだった。

ところが、卒業式を一週間後に控えたある日のこと。俺は担任に真昼間に呼び出された。場所はあまり行きたくない職員室。高校生で職員室に入りたいなんて奇特な奴はあまりいないだろう。

「え？ ……卒業、の……挨拶？」

担任から耳を疑う話を聞いた。

「そつだ。お前が挨拶をするんだ」

頭が真っ白になる。俺に、長々とした挨拶をしるといっても出来はしない。いや、出来ないと思っている。

「ぼ……くは、この……通り……なんですが」

「分かっている」

どこが分かっているんだ。さらし者にでもなれというのか。

大体人前でもりながら話すことほど精神的につらいものはない。嫌でも俺が『普通』ではないのだと思いきらされる。

考えただけで歯がかちかちとなる。身体はがたがたと震える。  
「何でもいいから挨拶してみろ」

この担任が頑固だということを俺は知っている。言い出したら聞かないだろう。

「分かり、ま……した」

俺は職員室を出ると走って校舎の外へ飛び出した。目に涙を浮かべて、最寄りの駅までずっと駆けて行く。途中で何人かの後輩を追い抜いた。部活帰りのようで、俺を不審な目で見る。  
変なのは自分でも分かってる。

三月の風はまだ冷たい。冬の残り香がまだあるんだということを  
感じさせる。

電車を待っていると涙が乾いてきた。

うん、もう大丈夫。とりあえず今は大丈夫。

自分の胸に手を当てて落ち着かせる。やれやれ、俺はやっぱり根性なしなのかもしれない。

電車が来た。平日の昼間だからか、人は少ない。

がたんつと音を立てて発車する。

『次は本町』

いつものアナウンスだ。

この見慣れた街並みと聞きなれた放送を三年間聴いてきた。

窓の外には所々に田んぼがある、東京には似つかわしくない風景が広がっている。

本町駅を抜けると終点まであつという間だった。

そこで乗り換えて、家に着く。

家に着くと普段着に着替えて、パソコンを開いた。海舟からメールが来ている。一体どんな内容だろう？

『ザビエル降臨』

大事な用件かと思った俺が馬鹿だった。

返事には

『保険金詐欺』

としておいた。

それからネットサーフィンに興じていたが、気持ちは落ち着かない。

一時間ほど遊ぶと、卒業式の挨拶文章を作り始めた。なるべく、発音しやすい音で文章を作らなければ。

まず、た行の音は発音しにくいから『たくさん』とか『たゆまず』とかは駄目だ。それとモノによつてはか行も言いづらくなる。『語り合った』『貴重な』も駄目。結構言葉を練らなければ成らない。多少変な文章でもいい。言える言葉を探さなくては。

考えに考え、とりあえず数時間で文章にすることは出来た。問題はこれを本番で話せるかどうか。

そんな時に海舟からパソコンにメールが来た。

## 第二話：言葉探し（後書き）

こんばんは、Jokerです。

仕事が早く終わったので、家でパソコンを叩いています。

遅くなりまして、すみません。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5350/>

---

Heroes

2010年10月11日01時01分発行